

野口健さん

[アルピニスト]

「富士山から日本を変える。」

世界7大陸最高峰登頂後は、清掃登山へ。

元「落ちこぼれ」アルピニスト・野口健さんが、
今思うことを熱く語ってくれた。

先生とは

先生とは、人を育てる職業です。2001年に、これからの環境問題を担っていく人が育ってほしいという願いから、「環境学校」を開校しました。今では、小笠原、屋久島、白神山地、尾瀬など、日本全国に広がっています。すぐには目に見える成果は出ませんが、活動は続けることが大切だし、それが一番難しい。コツコツと、環境を守っていける人材を育てていきたいと思っています。

環境学校に来る子どもの中には、親から虐待を受けていたり、父親と話したことがないような子もいます。親や先生は、子どもにとって最も身近な大人です。そんな大人が、子どもから「ああいう風にだけはなりたくない」と思われてしまっている。僕が全寮制の学校に通っているころの先生たちは、本当に厳しかった。悪さをして殴られたり停学になったりしたけど、いつもフェアで決してむやみに殴ったりはしなかった。悪さをしたときに放っておかれると、むなしい気持ちになるものなんです。大人は本来、



子供にとって強くてかっこよくないといけないんですよ。

全国の学校を回って

7大陸最高峰登頂の後から、学校で講演

する機会が多くなりました。『落ちこぼれてエベレスト』という本を出版したからか、「落ちこぼれ」が多い学校からの依頼が多いんです。そういう学校に行くと、講演をしても、人の話を聞かず携帯電話をいじっていたり、ウロウロと歩き回っていたりする生徒が目につく。はじめは信じられなかったのですが、先生も見て見ぬふりをしているのです。頭にきたので、壇上から降りて行って、ふざけていた生徒を殴ったことがあります。むこうもキレて襲いかかってくると思って身構えたけど、その生徒とまわりの連中は、口をあけてぼかんとしていた。それから、後になって謝りにきました。暴力は良くないですが、子どもには本気で叱ってあげないと駄目なんです。

少年院での闘い

では、犯罪を起こして少年院に入るような子供はどんな風なのかと思い、自分からお願いして少年院に講演にいきました。少年院では、「今日は闘いだ!」と気合を入れて話をしました。意外だったのは、聞いている全員が目をはなさず、真剣に話を聞いてくれたこと。彼らは一度どん底まで落ちたからか、危機感が強く、生き生きとしていました。ずるずると悪さを繰り返すより、いっそ少年院に入った方がいいと思うほどです。しかし、彼らと交流するようになって改めて感じたのは、日本はセカンドチャンスが簡単には与えてくれないということです。



私の尊敬する植村直己さんは、「冒険とは生きて帰って帰ること」と言われています。しかし、植村さんがマッキンリーで亡くなる直前の日記では、「何が何でも登る」と書かれていました。自然を相手にする登山では、「何が何でも」はありません。それが、なぜそのように思われたのか。それが理解できたのは、自分が2度エベレスト登頂に失敗したときでした。日本では、失敗をすんだれも相手にしてくれません。一度それを経験すると、悪天候でも引き返すことができなくなってしまうのです。本来、登山で悪天候によって引き返すのは「失敗」ではありません。ヨーロッパの登山家などは、悪天候が続くと登頂を早々に諦めてテントでワインを飲んでいます。そういう心のゆとりが、ゴミを捨てないし、遭難を起こさないという「成功」に結びついているのだと思います。すぐに「失敗」というレッテルを貼ってしまう日本は、ゆとりがない。登山でも少年院でも、まわり道をしたからこそ学んだことがあり、できた仲間がいる。そういう人にセカンドチャンスが与えられるのが、「ゆとり」のある社会だと思います。

野口さんにとっての「オフ」は?

家にいることはほとんどないですね。山を降りると海に行ってスキューバダイビングをします。海に潜って生き物を見ると、地球のすばらしさを感じます。じつは山よりも海が好きなんです。(笑)

野口健 (のぐちけん) | プロフィール

1973年8月21日、アメリカ・ボストン生まれ。高校時代に「落ちこぼれ」となり、喧嘩がもとで停学処分。この時、故・植村直己氏の著書に感銘を受けて登山を始め、16歳から10年で世界7大陸最高峰に当時史上最年少で登頂。その後は、エベレスト清掃登山やシェルバ基金の設立に尽力。現在は、「富士山から日本を変える」をスローガンに、国立公園をはじめとした自然保護に取り組んでいる。

大人って、
強くてかっこよくない
いけないんですよ